

## 生家と襖

私が生家に居た少年の頃、祖父のエピソードを父から聞かせられた事があった。

祖父の時代、農業と養蚕の家だったが火事に遭い建て替えした。昔建て替える時は、前の家より大きく建てるのが慣習だった。私たちが育った家は大きい。二階建て一五〇坪以上あったと思う。屋根は茅葺きだから急勾配、今のビルの四階建て位の高さがあったと思う。

二階建てと言っても、階段はなく、梯子で登り降りする。小学校に行くようになると二階が寝室になる。寝室といっても、養蚕室の一部であり、部屋は広く二〇畳位あった。

萱葺き家の夏は涼しく、冬は暖かいと言っても、風の強い日は寢床にも隙間風が入ってくる。わら布団に潜り、豚っ子のように眠った日々が思い出される。

家の南、道路側は、広い縁側付きの奥の間と床の間の二室があり、床の間は神棚、仏壇と飾り床の間がある十二畳の部屋だった。この部屋はあまり使用しない、お客さんの寝室や特別の時使う。奥の間は二〇畳位の部屋で、一時期、珪藻土会社の物資部、購買の店になっていた事がある。

床の間と奥の間は、縁側を除いて障子だが、周りは全部襖だった。生家にはその襖に漢字の羅列、難しい字が毛筆で書いてあった。一枚の襖に、横十字、縦二十字、計二百字位、墨痕鮮やかにと表現したくなる、見事な漢文が書いてあった。

中国の名文だそうだが、チンプンカンプンで誰も分からない。生家の襖以外、余所の家には無かったようだ、

部屋の襖全部が漢文だらけ、その筋の人が見れば立派とか、宝物と言つて褒めるだろうが、私達には判らない。

だが部屋に入ると、子供心にも気持ちが悪く感じだった。父がこの字を書いた人のことを話して呉れた。

祖父の時代、火事に遭つて建て替へした頃、托鉢、虚無僧姿のお坊さんが、鐘をチンチン鳴らし廻つて来た。

祖父は見ず知らずの人でも、座敷に上げお茶を振る舞い、食事も出す。祖父はそんな世話好きな人柄だったようだ。

よもやま話をしたあげく、坊さんを泊める事になった。寝室は床の間、新築したばかり、部屋は立派だが襖は白紙だ。襖紙は日本で一・二を争う白石和紙が張つてあつた。

坊さんは御礼に襖に字を書いて呉れると言う。祖父も願つてもない事に喜び、お願いした。

一心不乱、見事に書き上げ、敷き放しの寢床で休み、虚無僧姿にかえり、祖父に御礼の言葉と、変な事を言い残し、朝早く出立していった。

「我が帰つた後に変わった事が起きる」

何の事だか分からないが、気持ちよく送り出した。

坊さんが帰つた後、祖母が布団を片付けに行つたら、寝小便で布団から畳に沁みでいて、吃驚してしまつたと、語り草になっている。

生家は昭和五十年まであつたが、建て替えて、襖も育つた家も昔語りになつてしまつた。